



大阪府立北野高等学校図書館

第5号

平成28年1月8日発行

みなさんは本校の図書館をどの程度利用しているだろうか。数学の演習・行事・部活動などで多忙を極める北野生が図書館を利用する時間などあるのかと疑問を持つ人も少なくなかろう。私自身も本校に入学したばかりのころは、そのように思っていた。

話は10年前にさかのぼる。入学前からなぜか高校内容の数学のプリント集が渡される。入学後も、中学時代のおだやかな授業は一変し、スピードも速く、内容の濃い授業についていくだけでも必死であった。たとえば、英語の授業では教科書を1年の途中で切り上げて、*Charlie and the Chocolate Factory* の原書をひたすら英語で読む授業に変わったときには、とんでもない学校に来たものだとして学校の選択に後悔したものである。大変ハイレベルな授業に加えて多くの行事が入り込み、一息つく時間すらなかった。そのような1年目の生活において、図書館を利用する機会はほとんどなかったといっても過言ではない。

ところが、2年生になると状況が一変する。担任が、図書館にいらっしゃる先生になったのである。そのため、図書館に出入りすることが多くなった。また、北野の生活にだんだんとではあるが慣れ始めてきた。以上の理由で、図書館で本、特に小説を借りる機会がだんだんと出てきた。

いろいろな小説を読む中で、一番印象的な作家は重松清であった。重松清の作品はとても読みやすいものが多く、読書初心者であった私にとって手に取りやすいものだった。

重松清の作品の特徴は何よりリアリスティックな描写にある。小説、つまり作り話であるにもかかわらず、すべて現実で起こってもおかしくないようなことばかりなのである。そして、心情の描写も見事と言わざるを得ない。飾り気のない言葉遣いであり、素直な気持ちが見事に描写されていて、それが筆舌に尽くしがたい感動を与えてくれる（ちなみに、重松清の作品を電車の中で読むのはなかなか勇気がいる。彼の作品にはたいていハンカチを要するのである）。

そこで、今回、重松清の作品を4作品にしぼって取り上げたい。多忙の中でも本に打ち込む時間を作るきっかけとなれば幸いである（これは、現在の私自身への言い聞かせでもあるのだが）。

以下すべての作品の著者が重松清であるので、著者名は省略する。

## 『きみの友だち』新潮社（913/S5/5）

「友だち」とはどのような人だろうか。ツイッターやLINE、facebookでつながっている人？いつもノートを見せてくれる人？部活やクラスが一緒にいつも話す人？

私が大学在学中に「便所飯」という言葉が生まれた。一緒に食事をする相手がおらず、1人で食事しているのを見られるのが嫌だから、トイレの中で食事をするというものらしい。しかし、一緒に食べる相手は必ず「友だち」といえるのであろうか。この小説は、本当の「友だち」とは何かということを考えさせる作品である。

まず、手法が面白い。「〇〇ちゃん—最初は君の話をしようと思う」という形の始まりが各章の冒頭にあり、章ごとに語り手が語りかける相手が変わるのである。そのため、視点が各章で変わるため、人間関係の構図を客観的に見ることができる。この語り手が誰であるかということも考えながら読むとさらにおもしろいであろう。

話全体の主人公は恵美という少女である。性格が明るく友だちが多い活発な女の子だったが、ある事故がきっかけで松葉杖の生活を余儀なくされる。恵美は、その事故によって「友だち」を多く失ってしまうが、唯一入院を繰り返すクラスメートの由香とはいつも接するようになる。二人はほかの「みんな」とは離れた世界にいるが、それでも言葉にしなくても通じ合う関係になっていく。一方、「みんな」の世界は、様々な人間関係が交錯している。そして、その「みんな」の世界では、今日の「友だち」が明日「友だち」ではなくなるかもしれない。複雑な人間関係を壊さないようにいつも緊張感でいっぱいであるのだ。

「いなくなっても、一生忘れない友だちが一人、いればいい。」これは、この小説の中で最も印象的であったフレーズである（ちなみに、高校生のころ小説の中で好きなフレーズがあればそれを英訳していた。日本語さえあれば、いつでも英訳問題はできる。ぜひ読書をしながら好きな言葉を英訳してみて

ほしい。好きな言葉であればあるほど、素直に表現できると私は思う)。集団生活を余儀なくされる学校生活では様々な人間関係が存在するであろう。私自身も人間関係で悩んでいたこともあったが、この本を読んで友だちは決して人数ではなく、心を本当に通じ合わせられるかどうかが重要であることに気付いたものである。

### 『きよしこ』新潮社 (913/S5/6)

吃音（言葉をなめらかに話すことができない状態のこと）を持つ主人公きよしの成長物語。父親の転勤のために、何度も転校を繰り返すきよし。最初の自己紹介のときに、きよしの「き」をいうことができずに、同級生に笑われたりからかわれたりするため、ふがいない思いをいつもしてきたきよし。それでも、彼は「きよしこ」の前では自分の言いたいことを言えるようになる。きよしが吃音で悩む中、「きよしこ」は教えてくれる。「誰かになにかを伝えたいときは、そのひとに抱きついてから話せばいいんだ。」と。

言葉を話すことに苦勞する少年を淡々と表現してはいるのだが、多くの不思議な人々と出会うことで成長していく主人公が描かれている。あとがきも飛ばすことなくしっかりと読むことをおすすめする。

### 『その日のまえに』文藝春秋 (913/S5/4)

みなさんは、死について考えることはあるだろうか。私は、高校生のころ死ぬことがひたすら怖くて仕方なかった。死ぬとどうなるのだろうか、どこに行くのだろうか、などと考えていたものである。

高校生のとき、この本を読んで考えが変わるきっかけとなったことを覚えている。たしかに、死は悲しいものであり、つらいものであり、嫌なことである。しかし、それは避けてはとおれないことでもある。

本書の構成は、短編集であるが、それぞれが関連している。とくに、『その日の前に』、『その日』、『その日のあとで』は、40代で余命を告げられた母（和美）と、その家族の姿を描写している。

重松清は本当にすごいと思わずにはいられない作品である。この作品は、死を手の届かない非現実的なものとしてとらえたり、わざとらしい書き方で読者を引き込ませようとしたりは決してしない。本当に、私たちの周りでありえることとしてリアリスティックに表現しているのである。

和美が危篤に陥ったときの次の一節が印象的であった。

**ひとが危篤に陥ったときはもっとあわただしいものだと思っていた。とるものとりあえず病室にかけつけても、臨終に間に合うかどうか。そんな場面を、ドラマや漫画や小説で何度も見てきた。だが、現実はずう。時間はゆっくりと流れる。**

生きている人間にはその日常があり、それは強いものであるとも本文で述べられる。生きている人間が死をみとりながらも自分の日常を生きる。死は決して特別なものではなく、我々の身近に起こることであり、それを生きる人間がどのように乗り越えていくかが肝要なのである。

## 『せんせい』新潮社

この作品は、6人の先生とその教え子が織りなす作品である。授業をするということだけではなく、卒業後も先生と生徒という人間関係が続きそれぞれが両者の人生に影響しあうと、この作品を読んで感じた。そして、この作品を大学生時代に読んだ私は、高校教員か民間就職、大学教員かを迷っていたのだが、高校教員になろうと決意を固めたのである。

私が先生について卒業後一番思い出に残っているのは、先生の（勉強以外の）雑談である。先生の雑談を聞くために、授業を聞いていたこともあった。それでも、雑談が面白いと授業に引き込まれ、勉強の世界に没頭できたものである。先生が授業を楽しんでもらえるように工夫なさっていたのだと今になってわかるのである。

ここで本に戻る。内容はもちろんすばらしい。先生は生徒の一生の「せんせい」であるが、時間がたつにつれて、生徒はその時の先生と同じ年齢になり、先生の気持ちがよくわかることがうまく描写されている。

あとがきに、とても感銘した一節があるので紹介したい。

**僕は教師という職業が大好きで、現実に教壇に立っていらっしゃるすべての皆さんに、ありったけの敬意と共感を示したいと、いつも思っている。けれど、僕は同時に、教師とうまくやっていけない生徒のことも大好きで、もしも彼らが落ち込んでいるのなら「先生なんて放っときゃいいんだよ」と肩を叩いてやりたいと、いつも思っている。**